

# 日本語学習者に地方共通語を教える必要はあるか？

副 島 健 作

## 0. 序

従来の語学教育における「誤用」は、ことばに「規範」を設定し、その「規範」から逸脱したものと考えられてきた。こうした観点から言えば、地方における伝統方言、ダイナミックに日々変化する若者語、生活語として広く通用する地方独特の言い回し（以下、地方共通語<sup>(1)</sup>）などはもはや「規範」である標準日本語（以下、共通語）から逸脱した「誤用」とみなされ、教育上何らかの配慮がなされるのが一般的である。

しかし、こうしたとらえ方は以下の点で疑問が残る。

- ① 語学教育の最終目標は「規範」を身につけることか、それとも使えるようになることか。
- ② 地域差や世代差を超えた絶対的な「規範」が必要か。
- ③ 「正用」(=「規範」)の基準はどこにあるか。どうやって決定するか。

教科書に記述されている文法・語彙・テキストを正確に読み上げられるようになる等、ある程度のルールの習得は不可欠だとしても、言語がコミュニケーションの手段であり、道具であるからには、実用性も重んじられなければならない。日本語教育においても、教授項目である文法は「正確さ重視」から「目的を達成できる」ものへと見直しが必要だとされてきた（野田編 2005）。学習者の多様化に対応し、学習の目的や周囲の環境におうじて、規範通りに正しく使うことより、多少誤りがあっても、意志を正確に伝えることやその能力を重視したほうがよいという考え方である。上級レベルの学習者だけではなく、初級や中級の学習者であっても、目標言語が生活言語で、その使用が強いられるような環境にある場合には、相手との親密度を高めるため、地域や世代におうじて適切に言葉を使い分け、違和感なくスムーズに気持ちよくコミュニケーションをとることがある程度は必要になってくる。

さらに、一般的に「正用」は「母語話者の内省による文法性判断や言語行動」に求められるが、そもそも母語話者の内省が多様であり、その判断や行動も多様であるところをどうやって一般化するか、という解決すべき問題がある。言葉は多様で、常に変化するものである。とすれば、語学教育に絶対的な「規範」を設定すること自体が賢明ではないとさえ思われる。本来、母語話者は多様性に柔軟に対応し、自律的に修正する。そのことが「規範のゆれ」となって現れる。学習者が母語話者を理想とするなら、「規範」から逸脱することを恐れず、独自の文法を変えつつ、適度に使い分ける能力の習得を目指すべきである。

本論は、このように「日本語能力の向上」が「正しい」共通語に近づくことである、とする従来の立場を再考し、「多様な」日本語を受け入れ、適切に対応していくことこそ「日本語能力の向上」である、ということを主張する。そのための一方策として、沖縄地方を事例に、その地方共通語

である「ウチナーヤマトウグチ（沖縄大和口）」を取り上げ、2006年に行った沖縄県出身の日本語母語話者と沖縄県外出身の日本語母語話者の使用意識の調査結果から、生活語としての地方共通語が非母語話者の言語習得にどのような影響を与えるかを考察する。

## 1. ウチナーヤマトウグチ

沖縄地方の地方共通語はウチナーヤマトウグチと呼ばれる。「沖縄における沖縄方言から日本語方言への言語転移の過程で、主として、一中略— 沖縄方言を基に日本語を習得していく段階での干渉（Interference）の現象であり、またそれによってできた言語作品」（屋比久 1987: 122）であり、「話者は標準語をはなそうと志向しているが、標準語が基盤にあって、その干渉をうけてあらわれる言語現象」であって、「発音、文法、語彙のどの側面にも方言の干渉がみられる」（高江洲 1992:246）言葉である。そのため、「見かけ上はきわめて日本語に似ているとしても、琉球語の特徴をうけつぎ、日本語とはことなる体系をもった、日本語でも琉球語でもない、新しい言語」（かりまた 2006: 56）である。金城・尚（2000）は沖縄の大学生に使用実態の調査を行い、70項目のうち39項目（55.7%）について半数以上の人在使用を認めたと述べている。この調査からもウチナーヤマトウグチが地方共通語として生活の中で広く使用されている現状がわかる。

その一端を紹介すれば、「かさをさす」を「かさをかぶる」、「たばこをすう」を「たばこをふく」、「めがねをかける」を「めがねをはく」、「髪を刈る」を「頭をさる」というようなものである。語形そのものは共通語にも存在するものであるが、意味や使い方にずれがあるものが多いのが特徴である。

中でも、「～はず」や「～よう（～ましょう）」は日本語の基礎的な文法項目の1つであり、初級日本語レベルで取り扱われる文法項目となっている重要なものであるが、その意味範疇がずれしており、沖縄以外の地域の母語話者でさえ戸惑うことも少なくない。

(1) おじいさん来るはずよ。ちょっと待とこう。

(2) 先に帰りましょうね。

という例で、(1)はウチナーヤマトウグチでは「多分来るよ」ぐらいの意味にしかならず、おじいさんが来る可能性が50%ぐらいで、その確信がない場合でも用いる。また、(2)はウチナーヤマトウグチでは、特に誰かを誘っているわけではなく、「先に帰るね」と宣言しているにすぎない。実際発話者は1人で帰ってしまう。

このようなずれに他地域の話者が遭遇した場合、①「誤った日本語」だから、使わないようにしようとする、②「変な（または、おもしろい）日本語だ」と思いつつ、それを日本語の変種の1つとして受け止め、必要があれば自ら使用する、③これが「正しい日本語」なので、独自の文法規則を修正し、さっそく使ってみようとする、と対応の仕方が大きく3つに分かれると思われる。「規範」を重んじるのであれば、①となり、多様性を重んじるのであれば、②となるであろう。また、しっかりした「規範」をまだ身につけていない場合、③となる。現実的に考えると、生活語として地域で使われている日本語を使ったほうが、お互いに親近感が増し、会話を円滑にし、よりよい人間関係を築くためには有効であろう。したがって、母語話者は②の対応をするのが一般的であると思われる。一方、日本語学習者は上級であっても習得した日本語にさほど自信がない場合、③の対応となることが予想される。そうなると、今度は地方共通語がこの学習者の「規

範」となってしまう。しかし、実際には共通語も地方共通語も時と場合によって使い分けられるようになることが理想的な話者と言える。そのためには日本語が多様であることに気づかせるべきである、というのが本稿の主張である。

本論では、まず、ウチナーヤマトゥグチの「～はず」の使用意識の実態を沖縄出身の母語話者への調査から明らかにする。次に、沖縄以外の出身者の母語話者がウチナーヤマトゥグチの「～はず」をどのように使用しているかを調査し、その対応を検討する。最後に、沖縄に滞在している上級の日本語学習者の言語習得との関係を把握する。その結果をふまえ、「日本語能力の向上」には言語の多様性の認識が不可欠であるということを主張する。

## 2. 「～はず」について

共通語において「～はず」は、寺村（1984）、奥田（1993）、松田（1994）、木下（1997）、岡部（1998）、中畠（1998）等の研究により、基本的に「論理や既存知識に基づいて考えた結果得られた確信を示す」（庵ほか 2002: 210）ということが明らかにされ、教育現場では、「～から」等で示される根拠や広く世間一般において当然とされる事柄から推測し、自分の確信を述べる表現だと説明される。

(3) 今日は日曜日だから、銀行は休みのはずです。

(4) この薬を飲めば、すぐ病気はなおるはずです。

しかし、ウチナーヤマトゥグチにおいて「～はず」は、「根拠があるばあいもないばあいも『するはず』を用いることができる」（高江洲 2002: 154）とされ、根拠や当然と思われる事柄ではなくても、主観的な推量を表す表現として用いられている。

(5) それは食べてもいいはず。

(6) (行ったことがないから、わからないが) もう十時だから、たぶん開いているはずよ。

(7) 太郎は帰ったはず。

(8) 昨日十時に来ると言っていたから、今日はちゃんと来るはずよ。

市原（2006）や葦原（2015）でもウチナーヤマトゥグチの「はず」が共通語と異なることが指摘されている。本稿では、共通語と異なる、このような確信がなくても使われる「～はず」の用法が沖縄において現実にどのくらい気づかれ、許容されているのか、また、同じ日本語母語話者であっても、沖縄出身とそうでない話者との間でその使用の実態に差があるかどうか、さらには、留学生の日本語習得に地方共通語が及ぼす影響について考え、記述していくことを試みる。

## 3. ウチナーヤマトゥグチの「～はず」の特徴

### 3-1. 形態統語的特徴

まず、ここでは、ウチナーヤマトゥグチとして、日常生活で使われている「～はず」が語のどのような形と結び付くかを述べる。

表1に示したとおり、共通語の「～はず」は、動詞やイ形容詞の場合、終止形（普通形）と結びつくが、ナ形容詞や名詞の場合は名詞に続く形（非過去の場合、ナ形容詞の場合は「-な」を、

名詞の場合は「-の」を付属させて用いる。一方、ウチナーヤマトゥグチの「～はず」は、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞のいずれも、終止形（普通形）と結びついて用いられる（新垣ほか 2007: 30）。このように、ナ形容詞、名詞の場合に共通語との違いが現れてくる。

表 1. 「～はず」の結びつき方

	共通語		ウチナーヤマトゥグチ	
	非過去	過去	非過去	過去
動詞	行くはず	行ったはず	行くはず	行ったはず
イ形容詞	高いはず	高かったはず	高いはず	高かったはず
ナ形容詞	静かなはず	静かだったはず	静かだはず	静かだったはず
名詞	鳥のはず	鳥だったはず	鳥だはず	鳥だったはず

また、ウチナーヤマトゥグチの「～はず」は用法上のズレから共通語にはない次のような接続表現「～から」と結びつくことも可能である（以下、例はすべて作例<sup>(2)</sup>）。

- (9) 私がそう言ったからだはずね。  
 (10) ドアが壊れたのは、強く押したからだはずね。

いずれも「～だはず」は「～だろう」とほぼ置き換え可能で、確信のない主観的な推量の意味として用いられ、共通語の「～はず」には見られない用法である。

### 3-2. 意味的特徴

次に、ウチナーヤマトゥグチの「～はず」の意味的特徴を考察する。いくつか典型的な例を示しておきたい。

- (11) 天気予報によると、あしたは寒くなるはず。  
 (12) A: 比嘉さんって、どんな人？  
 B: くわしくは知らないけど、ハンサムだし、優しそうだし、いい人だはずよ。  
 (13) 渡辺さん、このごろ早く帰るね。恋人ができたはずね。  
 (14) (空の様子を見て) もうすぐ雨が降るはずよ。  
 (15) 日本の経済はまだしばらくよくなるはずよ。  
 (16) 台風の日<sup>(1)</sup>に海に行ったら、とってもあぶないはず。

(11)、(12) は伝聞による「～らしい」、「～そうだ」、(13)、(14) は様態による推量「～ようだ」、「～そうだ」、(15)、(16) は想像による推量「～だろう」や「～にちがいない」で置き換えたほうが共通語としては一般的である。

このように、ウチナーヤマトゥグチの「～はず」は共通語と形式が同じなのに、意味がずれており、沖縄において現代の若者たちの間で自然言語として広く一般に使われていると考えられる。次章ではその実態と、沖縄以外から来た日本語母語話者がどのくらい使用しているか、を調査した結果を述べる。

#### 4. 「～はず」の使用にかんする母語話者へのアンケート調査

##### 4-1. 調査概要

調査は、2006年6月に沖縄県の大学に在学する大学生を対象として行った。得られた有効回答票は日本語母語話者（以下、NS）40名、そのうち20名は沖縄出身者、残りの20名は沖縄県外出身者である。アンケートの内容は、「次の文章を読んで、あなたが以下の言葉を使うあるいは使ったことがある場合、（ ）の中に○、使わないあるいは使ったことがない場合×をつけてください。間違いだと思っても日ごろ使っているものには、△をつけてください。」という質問を設定し、ウチナーヤマトゥグチにかかわる言語形式を示して、その使用についての現状認識を判断させるものである。

なお、本調査および後述する上級日本語学習者に実施した調査は14年前に実施したものであり、SNSの発達などでコミュニケーション行動が急激に変化してきた昨今の現状を必ずしも反映したものではないが、その後も市原（2006）、葦原（2015）、白岩（2019）に言及があるようにウチナーヤマトゥグチの「～はず」は使用され続けており、それに対する沖縄出身者、沖縄県外出身者、日本語学習者の使用意識も大きく変わることはないと思われる。

##### 4-2. アンケート調査の結果と分析

実際のアンケートではウチナーヤマトゥグチの種々の言語形式を取り上げたが、そのうち「～はず」にかんする回答をデータとする。その結果について、表2に示す。

①、②は形態統語的特徴にかんする質問であり、③は意味的特徴にかんする質問である。③は「雪ちゃんが来る確率は50%」という注記を付し、話者の確信を述べる共通語の「～はず」とは意味がずれていることを明示した。

表2. 沖縄地域の「～はず」の使用者数（各20人中、下段は%）

		沖縄出身			沖縄県外出身		
		○	×	△	○	×	△
①	病気だはずよ	19	1	0	9	8	3
		95	5	0	45	40	15
②	きれいだはずよ	18	0	2	10	9	1
		90	0	10	50	45	5
③	A: 雪ちゃんは今日のパーティに来るかな?	18	2	0	9	6	5
	B: たぶん来るはずよ。	90	10	0	45	30	25

いずれも沖縄出身のNSはほとんど（①95%、②90%、③90%）が使っている（○）と答えている。このことから、沖縄出身の若者の間では、ウチナーヤマトゥグチの「～はず」（以下、「～はずU」）が普通に使用されていることが確認される。これは、金城・尚（2000: 29-30）が沖縄の大学の学生152名を対象に行った、「～はずU」がほぼ80%-95%という高い使用率にあるという調査結果からも支持される。

一方、沖縄県外出身のNSの使用はほぼ半数（①45%、②50%、③45%）にしか満たず、「ゆれ」が生じていることが確認される。この「ゆれ」は、「規範」からの逸脱にどのように対応するかという言語行動と無関係ではないと考えられる。あらゆる日本語母語話者が共通語を「規範」とし、常にそこから逸脱しないように気をつけているのであれば、「～はずU」の使用は回避されるはずであるが、実際は半数近くが使っているという結果となっている。さらに、「間違いだと思っても日ごろ使っている」（△）としたNSが約2割前後（①15%、②5%、③25%）おり、「規

範」から逸脱したという意識を持ちながらも、使用せざるを得ない状況が沖縄の言語生活の中にあることが窺える。この結果をみると、母語話者の半数が「規範」にこだわらず、多様性において自らの使用言語を修正し、時と場合、相手によって使い分けているということが考えられる。こうした話者の存在が「規範のゆれ」を生じさせ、言語をダイナミックに変化させる原動力となっているのであろう。

## 5. 「～はず」の使用にかんする非母語話者へのアンケート調査

### 5-1. 調査概要

上記の調査結果から、沖縄県外出身のNSの「～はずU」の使用に「ゆれ」があることが確認されたわけだが、ここでは、地方共通語と日本語非母語話者NNSの言語習得の関係をとらえるため、同じ調査を琉球大学に在籍した上級日本語学習者<sup>(3)</sup>に実施し、その傾向を把握する。

調査目的：ウチナーヤマトウグチの使用実態を明らかにする

被調査者：琉球大学留学生 20名（日本語学習歴3年以上）

（国籍） 韓国9名 中国3名 台湾3名 アメリカ1名 タイ1名  
ウクライナ1名 ボリビア1名 カナダ1名

（年齢） 18歳から28歳

（性別） 男5名 女15名

（沖縄滞在期間） 1ヶ月～24ヶ月

調査実施：2006年6月

調査方法：質問紙を使用したアンケート調査

### 5-3. NNSの「～はず」の使用と沖縄滞在期間との関係

非調査者のうちほとんどは短期交換留学生として沖縄に留学中のものである。母国で日本語を専攻しており、教室中心に模範的な日本語を習得し、「～はず」にかんしては共通語の形態統語的特徴、意味的特徴しか習っていない。すなわち、「～はずU」は沖縄に来てはじめて接したもののばかりである。また、調査を行った琉球大学では当時は特に地方共通語の教育は行っていなかったため、「～はずU」を使えるようになるかどうかは自然習得によるしかなく、沖縄滞在期間と相関が見られることが予想される。

ここでは、調査結果を沖縄にいる期間の長さによって、20名の被験者を全体の中央値よりも高い群と低い群（10名ずつ）にわけ、それぞれのデータについて表3のようにまとめてみた。まず合計を見ると、NNSは「～はずU」の使用（○）が7割を超えており、留学生の間でも「気づかれない方言」としての地方共通語がかなり使用されていることがわかる。また、形態統語的特徴である①と②の使用（平均71.25%）より③の意味的特徴の使用（85%）のほうが若干多い。「規範」との違いが分かりやすく、自己修正の容易な統語のずれに比べ、意味のずれは気づかれにくく、多用されることが窺える。また、「間違いだと思っても日ごろ使っている」（△）は全体的に少なく（5%）、○と△の間には有意差があった（ $F_{(1,8)}=462.25, p \leq .01$ ）。NNSは、とくに「規範」から逸脱したという意識を持たず、「～はずU」を自然に使っていることが確認される。

表3. NNSの「～はず」の使用(下段は%)

被験者	滞日期間(A)	問 使用(B)	①	②	③	計
			病気だはずよ	きれいだはずよ	たぶん来るはずよ	
1～10	A<7.5	○	8 80	8 80	9 90	25 83.3
		△	0 0	0 0	0 0	0 0
11～20	A>7.5	○	6 60	7 70	8 80	21 70
		△	1 10	1 10	1 10	3 10
計		○	14 70	15 75	17 85	46 76.6
		△	1 5	1 5	1 5	3 15

次に、沖縄への滞在期間が「～はずU」の使用と関係があるかどうか、分散分析を行った。その結果、沖縄滞在期間とその使用との間にくに有意差は見られなかった。規範から逸脱した「～はずU」は、教室では教えていないので、沖縄の言語接触環境の影響を受けて習得されるが、触れる機会が増えることによる効果ではないと言える。つまり、NNSは、自然環境によるインプットがあれば、教室で習得した「規範」は忘れられ、短時間で「～はずU」が習得されると考えられる。

#### 5-4. NNSと沖縄県外出身のNSの「～はず」の使用

表2と表3から、「～はずU」の使用は、沖縄県外出身のNSよりもNNSにより多用されているということがわかった。では、なぜNNSのほうが「～はずU」が受け入れられやすいのであろうか。

沖縄県外出身のNSが共通語からみると非規範的な「～はずU」を用いることがあまりないのは、ある意味で当然のことと言える。日常生活で接することにより、「規範」からのずれにある程度は気づくことができても、「間違った日本語」を使うことに抵抗を覚えるからである。また、地域のコミュニティにとけ込むために地方共通語の使用がどうしても必要だと感じて、体系的に教育してくれるような学校や教師がなく、なかなか正確には理解、運用できるようにならない。また、「他郷の人と分かる人がその土地の方言をペラペラとしゃべることについて、必ずしも好感を持って迎え入れる人ばかりではない」(真田 2001: 198)といった、外来者の地方共通語使用にたいしての日本人の評価意識、態度の影響も推測される。一方、NNSは日本語教科書で習った「規範」によって作られた学習者独自の文法を実際に運用し、応用することで修正し、習得していく。より触れる機会の多い沖縄出身のNSの「～はずU」の影響を受けて、共通語から逸脱した「～はずU」が自然に習得されていく可能性は否定できない。学習者にとっては教室でならった共通語よりも、実際に身の回りで使われている地方共通語のほうが模範的な日本語であり、そちらをためらいなく用いるようになるのであろう。

沖縄県外出身のNSかまたはNNSかの違いと、「～はずU」を自然に使用するかまたは間違いと思いながら使用するかの違いを要因とする分散分析を行った(表4)。その結果、どちらの主効果も有意であり(NSかNNSか： $F_{(1,8)}=7.20, p \leq .05$ ; ○か△か： $F_{(1,8)}=192.20, p \leq .01$ )、交互作用にも有意差が見られた( $F_{(1,8)}=28.80, p \leq .01$ )。

表 4. 地方共通語の「～はず」の使用者数の比較 (各 20 人中)

		全体	○	△
NS(沖縄県外出身)	<i>N</i>	6	3	3
	<i>M</i>	6.17	9.33	3.00
	<i>SD</i>	3.39	0.47	1.63
NNS	<i>N</i>	6	3	3
	<i>M</i>	8.17	15.33	1.00
	<i>SD</i>	7.22	1.25	0.00

このことから、全体的にみて、この「～はず U」は、間違いかどうかは意識されず、自然に使用されているが、沖縄県外出身の NS よりも留学生のほうがウチナーヤマトゥグチへの適応力が高い、ということが言える。さらに、留学生に比べ、沖縄県外出身の NS が間違いを意識しながら使用する傾向にあり、「規範」への対応に配慮していることが確認できる。

以上の点から言えることは、しっかりした「規範」を教室で身につけた NNS であっても、環境におうじて学習者独自の文法規則を作りながら、言語能力を向上させているということである。一方、自然に「規範」を習得した NS はなかなかそこから離れることができず、共通語と地方共通語との間で「規範のゆれ」という形で多様性に対応しようとしているのである。多様性への対応こそが母語話者の特徴的な言語行動であるとしたら、そのような能力を身につけることが、母語話者並みに上達することを目指す日本語学習者にとって目標とすべきことの 1 つであると考察できる。

## 6. 結

本研究では、沖縄地方を事例に、その地方共通語であるウチナーヤマトゥグチの「～はず」を取り上げ、沖縄県出身の日本語母語話者と沖縄以外の地域からの日本語母語話者の使用意識の実態と日本語学習者の使用の傾向を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (I) 沖縄県出身の日本語母語話者はウチナーヤマトゥグチの「～はず」を多用するが、沖縄県外出身の日本語母語話者は半数ほどが使用している。
- (II) 留学生のウチナーヤマトゥグチの「～はず」の使用と沖縄滞在期間とは相関がない。
- (III) 沖縄県外出身の日本語母語話者に比べ、留学生のほうがウチナーヤマトゥグチの「～はず」を多用する。また、日本語母語話者のほうが「間違いと分かっているが使う」傾向が高く、より「規範」に配慮した結果となっている。

沖縄県外出身の日本語母語話者と留学生との「～はず」の使用意識の判断の差は、それぞれの文法判断能力の差にあると思われる。母語話者は各自が持っている「規範」と比べつつ、「多様な」日本語を受け入れ、対応しているからこそ、判断にもゆれが生じる。一方、留学生には教室で学んだ「規範」があるものの、判断の基準としては「いま、ここ」にある生活語としての地方共通語のほうがより影響力が高いということが推測される。

しかし、このまま地方共通語の習得が進めば、他地域での言語活動に支障をきたす恐れもある。だとすれば、地方共通語が非母語話者の言語習得に及ぼす影響は、今後十分に考慮されるべきだと考える。すなわち、「多様な」日本語を受け入れ、適切に対応していくことを母語話者は自然に行っているのであり、言語習得の目標が母語話者並みになることにあるのであれば、「日本語



能力の向上」には言語の多様性の認識が不可欠であると言える。

これまで、日本語教育における地方共通語の扱いはそれほど高いとは言えなかったが、「大学では全国から学生が集まってくるため、地方共通語が使われる頻度は低いであろうが、留学生の地域社会への参加と生活行動空間の拡大によって地方共通語に接する頻度は高くなる」（高木ほか 1998: 85-86）ことは言うまでもなく、「学ぼうとする人の側にその必要性和動機がある場合、それに応えて支援すべきマニュアルが求められる」（真田 2001: 200）というように地方共通語教育の必要性もだんだん提起されるようになりつつある。地方共通語の教育は、方言を教えるのではなく、そこにある言葉、すなわち生活語を教えるということである。今後は、そのような観点からの日本語教育のとりくみが増えます必要になってくると思われる。

## 註

- (1) 本稿では、地域性を保ちながらも、共通語で話そうという意識が加わって、方言とは断定しづらい中間方言、ネオ方言（真田 1999: 47）、新方言（永田 1996: 11）、気づかれにくい方言（沖 1999）とされてきたものを「地方共通語」と呼ぶ。
- (2) 本文中のウチナーヤマトゥグチの作例および調査に用いた例文は、沖縄出身の母語話者によって自然な表現であると判断されたものを使用している。
- (3) 日本語能力試験 1 級合格者およびそれと同等レベルのものを上級レベルとし、アンケートの対象者とした。

## 参考文献

- 葦原恭子 (2015) 「沖縄県の地域共通語「～はず」のモダリティ：大学生をとりまく自然会話の分析を通して」『学芸国語国文学』 47: 72-85, 東京学芸大学国語国文学会
- 新垣公弥子ほか (2007) 『日本語バイリンガルへのパスポート—沖縄で日本語教師をめざすあなたへ—』大城朋子・尚真貴子 (監修), 沖縄国際大学日本語教育教材開発研究
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 市原乃奈 (2006) 「沖縄県の高校生と埼玉県の高校生の使用する「～はず」の差異について—ウチナーヤマトゥグチ「～はず」と共通語「～はず」の比較と語用論的考察の検討—」『文学研究論集』 25: 1-20, 明治大学大学院
- 岡部嘉幸 (1998) 「ハズダの用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』 947-960, 汲古書院
- 沖裕子 (1999) 「気がつきにくい方言」『日本語学—地域方言と社会方言—』 18 (13) : 156-165, 明治書院
- 奥田靖雄 (1993) 「説明 (その 3) —はずだ—」『ことばの科学』 6: 179-211, むぎ書房
- かりまたしげひさ (1996) 「沖縄若者ことば事情—琉球・クレオール日本語試論—」『日本語学』 25 (1) : 50-59, 明治書院
- 金城尚美・尚真貴子 (2000) 「沖縄の大学生の生活言語の実態—若者のウチナーヤマトゥグチ—」 *Southern Review*, 15: 25-39
- 真田信治 (1999) 「ネオ方言の実態」『日本語学—地域方言と社会方言—』 18 (13) : 46-51, 明治書院
- 真田信治 (2001) 『方言は絶滅するのか—自分のことばを失った日本人—』 PHP 研究所
- 白岩広行 (2019) 「ウチナーヤマトゥグチのハズについて—「だろう」との比較を中心に—」『立正大学文学部研究紀要』 35: 113-134, 立正大学文学部
- 副島健作 (2009) 「留学生の地域語にたいする意識—沖縄を事例として—」『欧米文化論集』 53: 53-71, 琉球大学法文学部
- 副島健作 (2011) 「他地域出身者における『来る』の地方共通語的用法の使用—ウチナーヤマトゥグチを事例として—」『言語文化学会論集』 37: 55-68.
- 副島健作 (2012) 「他地域出身者の「気がつきにくい方言」使用にかんする—考察—沖縄地域の「～わけ」の使用意識調査から—」 *Southern Review*, 27: 111-122.

- 副島健作 (2016) 「若者の地方共通語使用に関する一考察—沖縄地域のアスペクトの使用意識調査から—」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』2: 157-168.
- 副島健作 (2019) 「言語接触における『好まれる言い回し』に関する一考察—沖縄の地方共通語の「から」の使用意識調査から—」退官記念論文集編集委員会 (編) 『言語の研究—言語学、日本語学、日本語教育学、言語コミュニケーション学からの視座—』105-118. 花書院.
- 高江洲頼子 (2004) 「ウチナーヤマトゥグチ—その音声、文法、語彙について—」沖縄言語研究センター (編) 『沖縄言語研究センター研究報告3 那覇の方言: 那覇市方言記録保存調査』245-289.
- 高木裕子・後藤典子・山上龍子・渡辺文生・佐々木範子・趙恩嬉・林美和 (1998) 「山形市在住留学生に対する地方共通語教材」『山形大学紀要 (人文科学)』14 (1) : 71-91.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 永田高志 (1996) 『地域語の生態シリーズ琉球編—琉球で生まれた共通語—』おうふう
- 中島孝幸 (1998) 「当然を表すモダリティ形式について—ハズダとベキダ—」『甲南大学紀要・文学編』111: 15-28.
- 仲間雅子・西泉 (2003) 「ウチナー若者ことばにあらわれるじら—について」*Southern Review*, 18. 17-31. 沖縄外国文学会
- 中松竹雄 1973 『沖縄語の文法』沖縄言語文化研究所
- 西岡敏 (2009) 「琉球語の危機と継承」『言語』38 (7) : 40-48. 大修館書店
- 野田尚史 (編) (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 松田礼子 (1994) 「『はずだ』に関する一考察—推論による観念の世界と、その外に実在する現実の世界をめぐって—」『武蔵大学人文学会雑誌』26 (1) : 53-89
- 屋比久浩 (1987) 「ウチナーヤマトゥグチとヤマトウチナーグチ」『国文学解釈と鑑賞』52 (7) : 119-123. 至文堂